

ユニバーサル・ミュージアムで文章はどう書くべきか： コミュニケーション障がい者への対応を中心にした 年齢，発達，障がいの有無によるギャップ克服の試み

三谷 雅 純^{1)*}

Appropriate manner for writing in an universal museum: an attempt to overcome gaps caused from ages, developmental stages, and handicaps, with special reference to communication disabilities

Masazumi MITANI^{1)*}

要 旨

ユニバーサル・ミュージアムでの文章表現のあり方を探った。時代を変えて選んだ原文とそれを子ども向けに直したものを、コミュニケーション障がい者向けに直したものをそれぞれ作成し、それを当事者に評価してもらった。さらに作成したものを一般来館者に持ち帰ってもらって評価に代えた。子ども用は子どもに慣れ親しんだ言葉を選び、意味の区切りに空行を入れれば読みやすくなった。コミュニケーション障がい者には、①漢字とひらがなが同時に参照できること、②文章は短くすること、③文章は意味の区切りに空行を入れると理解しやすくなった。実物を供覧するという博物館の役割から、従来のユニバーサル・ミュージアムは視覚障がい者を対象とすることが多かったが、来館者に認識と知識化を促すためには、全ての人に理解できる文章表現が重要である。今後は、障がい者に読みやすい文章の工夫だけではなく、文章をいかにユニバーサル化するかが課題である。

キーワード：博物館，文章表現，認識と知識化，高齢者，子ども，コミュニケーション障がい者

はじめに

博物館には、学術や技術、芸術、芸能を広く伝えることが期待されている。一方、高齢者に顕著であるが、伝えるべき市民には、生きてきた時代によって価値観に差が見られたり、子どもでは発達段階によって理解や認識の程度に差がある。さらに、障がいの有無によっても理解や認識の程度に差が見られることがある。

そのようなすべての来館者が、学び、楽しめる施設がユニバーサル・ミュージアムである。そこでは、理念上、高齢者や子どものような理解や認識の差や、障がいの有無によらないサービスが必要である。そのような例として点字を解さない中途失明者を含めた視覚障がい者向けに、従来の視覚だけに頼った展示ではなく、触覚や聴覚、嗅覚を生かした展示が開発されている（鳥山，2005b；奥野，2006；東，2006；広瀬，2007）。ただし、それ

¹⁾ 兵庫県立人と自然の博物館 自然・環境マネジメント研究部 〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目 Division of Nature and Environmental Management, Museum of Nature and Human Activities, Hyogo; Yayoigaoka 6, Sanda, Hyogo, 669-1546 Japan

* 兼任：兵庫県立大学 自然・環境科学研究所生態研究部門 〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目 Division of Ecology, Institute of Natural and Environmental Sciences, University of Hyogo; Yayoigaoka 6, Sanda, Hyogo, 669-1546 Japan

らは美術品や民具、化石、鉱物などにかざられている。さらに、通常は文字で表す抽象的な概念や仕組みなどでは、誰でも分かるように表す技術が確立されていない。しかし、高齢者や知的障がい者、コミュニケーション障がい者には、これらの抽象概念や仕組みの理解を求める場合がある。そして、このような問題の解決は個別館の意識に任せられているのが現状である(鳥山, 2005a)。

高齢者には認知症や失語症などでコミュニケーション機能に何らかの障がいがある人は多い(米田, 2007)。これに交通事故などで脳に損傷を負った人、脳性麻痺者、知的障がい者まで含めると、コミュニケーション障がい者が市民に占める割合は、きわめて高いことが予想できる(三谷, 2007; 2008)。

コミュニケーション障がい者のうち、特に言語に障がいをもつ人には、一般的に、失語症、構音障がい、失声症、認知症がある。構音障がいとは舌や口がマヒをしてろれつが回らなくなる障がいであり、失声症は声帯の障がいやストレスで声が出なくなった状態をさす(全国失語症友の会連合会(編), 2009)。

失語症は脳梗塞や脳出血の後遺症であることが多いため、脳のどこにダメージを受けたかで、人によっていろいろな症状があらわれる(竹内, 1995)。よく見られるのは、〈話せない〉とか〈書けない〉などの「表現することが難しくなる」症状である。〈話せない〉人には、「言葉が思い出せない」、「わかっているけど、うまく言えない」、「思っていることと違う音や言葉になる」、「まとまったことをじょうずに話せない」人がいる。〈書けない〉人のなかには、「名前や住所(=固有名詞)が書けない」、「ひらがなを書くのがむずかしい」、「漢字で書くのがむずかしい」、「長い文章が書けない」などの困難をかかえている人がいる(全国失語症友の会連合会(編), 2009)。表音文字であるひらがなと表意文字である漢字では、困難に質的な差があり、失語症者では、一般にひらがなよりも漢字を理解しやすい人が多い。しかし、失語症以外のコミュニケーション障がい者は漢字よりもひらがなが理解しやすい場合があり、必ずしも漢字の多用が有効というわけではない(竹内, 1995)。

失語症者には「理解することがむずかしくなった」人もいる。〈聞いて理解することがむずかしい〉人や、〈読んで理解することがむずかしい〉人のことである。〈聞いて理解することがむずかしい〉人では、「早口で話されるとわからない」、「一度にたくさん話されるとわからない」、「話の内容を覚えていられない」といった困難がある。〈読んで理解することがむずかしい〉人では、「ひらがながうまく読めない」、「漢字がうまく読めない」、「新聞や雑誌の文章が長すぎてわからない」、「説明書などのロジックがわからない」といった困難がある(全国失語症友の会連合会(編), 2009)。現実には、ここに

あげた症状のどれかひとつだけという人は少なく、状態によって複数の困難が重なることが多い。

また特殊な場合であるが、失語症者には文法そのものがわからなくなった失文法(竹内, 1995)や失読症(中村, 1995)が知られている。いずれも、通常の文章表現では読めなかったり、読みにくさを感じている。これらコミュニケーション障がい者には文章表現の工夫が欠かせない。

このように、ユニバーサル・ミュージアムの立場から高齢者や子ども、コミュニケーション障がい者の読みやすさ・読みにくさを検討することが求められているが、検討した例はこれまでなかった。そこで、高齢者や子ども、コミュニケーション障がい者にとって読みやすい文章を探るために、明治、大正、昭和の各時代から文章を選び、原文と共に、それを子ども用、コミュニケーション障がい者用に書き換え、子どもとコミュニケーション障がい当事者に評価してもらった。合わせて、この文章に対して一般来館者に評価してもらった。来館者には原文と子ども用、コミュニケーション障がい者用に作成したものを持ち帰ってもらって、その持ち帰りのようすから反応を探った。ここでは、この文章の作成方法と観客の反応について報告する。ただし、一般来館者にどれくらいのコミュニケーション障がい者がいたかは確認するすべがなかった。

方 法

2010年(平成22年)12月11日から2011年(平成23年)1月10日の31日間、人と自然の博物館ミニ企画展「ウサギさんようこそ!」の展示の中で「神話(しんわ)や説話(せつわ)に登場するウサギ」に関わる印刷物を配布した。印刷物は、来館者が身近に感じ、かつ有名な文章を選び、高齢者から子どもまで、健常者から障がい者まで、さらに日本語の不自由な人にも共に楽しんでもらえるものをめざした。その目的にそって、各年代が子ども時代を過ごした明治時代、大正時代、昭和時代に親しまれた神話や説話の内、ウサギに関係した文章を題材に選んだ。文章は

- ①石原和三郎 作詞・田村虎蔵 作曲 尋常小学唱歌「大黒様」原文(子ども向け)、『尋常小学唱歌 第二学年 中』[明治38年(1905年)]
- ②南方熊楠作 「兎と亀との話」『牟婁新報』[大正4年(1915年)]
- ③山口昌男作 『アフリカの神話的世界』岩波新書F 67より、「いたずら者の野兎の話」(エチオピア・スーダン国境の近くに住むアヌアック族の民話) [昭和46年(1971年)]

とした（三谷，2011）。

原文から新たに作成し直したものは，子ども用とコミュニケーション障がい者用である。子ども用は子どもそのものを主な対象としたが，発達段階が未熟であったり，言葉が遅れていたりする成人も対象とした。

まず原文から子どものために書き直した文章を作成した。作成に当たっては，小学生（低学年女子3名，高学年女子2名），中学生（男子2名），高校生（男子1名）に子ども向けに作成した文章を見せ，読みやすいかどうかの評価を聞き，そのアドバイスをもとに複数回書き換えを行った。同様に，原文からコミュニケーション障がい者のために書き直した文章を作成した。作成に当たっては，失語症者を中心としたコミュニケーション障がい者のための地域活動支援センター「トークゆうゆう」（三田市）（評価者：男性4名，女性4名，計8名）と失語症者友の会「むつみ会」（明石市）（評価者：男性1名，女性2名，計3名）の意見を聞き，子ども同様に複数回の書き換えを行った。本稿の表1や本文においては，男女や年齢などから，コメントを出したコミュニケーション障がい者個人が特定できないように配慮した。

最後に，一般社会人の市民団体サイエンス・サロンを中心に検討の協力を仰いだ。市民団体サイエンス・サロンは，三谷と共に霊長類学や民族学，環境科学や教育実践に関することを広く話題提供しあう団体である。人と自然の博物館だけでなく，兵庫県三田市を中心にさまざまな施設で勉強会を開いている。本稿に関連しては，人と自然の博物館インターネットから，[ミニ企画展「ウサギさんようこそ！」の内，【神話（しんわ）や説話（せつわ）に登場するウサギ】や，ひとはくブログ『【神話や説話に登場するウサギ】の文章は，なぜあんなふうにしたのか？』を読んでもらい，対話形式で意見を聞いた。この話題提供に参加したのは，E-mailで問い合わせた人も含めて，男性10名，女性9名であった。

なお今回は統計的に意味のある書き換えというより，書き替えて問題になるところを洗い出すための試みであり，統計上の有意性は問題にしない。配布物に用いた写真やイラストレーションは，三谷が個人的に撮ったもの，パブリック・ドメインとして知的財産権が発生しないものや消滅したものを使った。

結果と議論

尋常小学唱歌「大黒様」

明治時代の尋常小学唱歌「大黒様」は，もともと子ども向けに作詞されたものであり，当時の小学校低学年の漢字習得の程度を考慮して，ひらがなが多くなっている（図1）。そのため子ども向きに作りかえる必要はないが，明治時代の唱歌であるために，現代の子どもにわからない表現がある。そのため，検討に参加した子どもからわからないと訴えのあった単語は本文に線を引き，脚注をつけた（たとえば，「あわれがり」は「かわいそうに思い」，「がまのほわた」は「水辺の植物のガマのほからとれる綿」など）。

コミュニケーション障がい者にわかりやすい文章表現を意図した印刷物（図2）は，コミュニケーション障がい

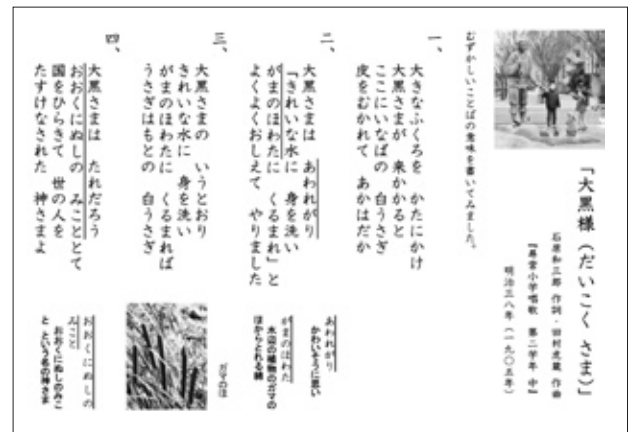


図1 調尋常小学唱歌「大黒様」原文（子ども向け）



図2 尋常小学唱歌「大黒様」をコミュニケーション障がい者向けに直したもの

い者に特異的なひらがなの読みにくさを考慮して、原文のひらがなで書いた言葉をできるだけ漢字にした。その結果一行あたりの長さが縮まり、長い文構造の理解に障がいが見られる複数の失語症者には、読みやすいと好評であった。また、文章は縦書きで、漢字とひらがなのルビを横に並べるようにしたが、そうするとかえって本文とルビが混乱する人がいたので、ルビであることがはっきりわかるように、ルビを丸かっこに入れて表すことにした。

「兎と亀との話」

大正時代に南方熊楠によって書かれた「兎と亀との話」は、和歌山で発行されていた新聞『牟婁新報』に、イソップ物語の有名な話を載せた時の文章である（図3）。イソップは紀元前のギリシャ人であり、寓話集であるイソップ物語は必ずしも子ども向けを意図して書かれたわけではない。南方の「兎と亀との話」も、けっして現代の子どもに親しみのある文章とは言えない。そこで、文章のまとまりごとに行間を空け、子どもの意見を入れて現代の子どもになじみやすい言葉に変えた（図4）。

コミュニケーション障がい者のためには、子ども用同様に言葉をなじみやすいものに変えたが、コミュニケーション障がい者の内、一部の失語症者では、縦書きでルビを振ってあるとわかりにくくなるという意見があった。また失語症者では漢字とひらがなを同時に参照したいという要望が強かったので、横書きにして、ルビと本文を混同しないよう、ルビは漢字に続けてかっこに入れて振るようにした（図5、表1参照）。

子ども向けにはひらがなで表していた「かめ」や「うさぎ」という単語も、ひらがなでは読みにくいコミュニケーション障がい者が複数いたのでかっこに入れ、「漢字のルビを振る」という、通常ではあり得ない工夫をした。行間を空けた方が文章を目で追いやすいという評価があったために、子ども向け同様に行間をあけた（図5）。

なお、子ども向けとコミュニケーション障がい者向けでは、当事者に適した文字の大きさや紙の大きさに関する要望を聞いて、A3サイズに印刷した。

「いたずら者の野兎の話」

昭和時代の「いたずら者の野兎の話」は、文化人類学者の山口昌男が書いた『アフリカの神話的世界』（岩波新書F 67、1971年刊）から引用したものである。原文は山口自身がエチオピア・スーダンの国境近くで採集した民話で、アニュアック族のはなす言葉からの翻訳である。「いたずら者（トリック・スター）」がいきいきと活躍する内容は子どもも興味を持つと思うが、原文は漢字が多く難解である（図6）。

「兎と亀との話」と同様に子ども向け（図7）とコミ

ュニケーション障がい者向け（図8）に試作したものを示す。

「兎と亀との話」と同様、原文はA4サイズで、子ども向けとコミュニケーション障がい者向けはA3サイズで印刷した。

表1に、コミュニケーション障がい者による文章の代表的な評価をまとめて示す。

コミュニケーション障がい者からは、文字にたよった文章だと、どうしても理解ができないところがあるので、コミュニケーション支援絵記号（付記のインターネット・アドレス参照）のようなヴィジュアル表現を取り入れてほしいという意見があった。しかし、文章をコミュニケーション支援絵記号で作ることは、現状では一般的でなく、将来のユニバーサル化のためにも、あえて取り入れずに試行した。別のコミュニケーション障がい者からは、長い文章を理解することは難しいが、横書きでも、縦書きでも、そのむずかしさは変わらないので、どちらでもよいという意見もあった。

一般社会人の評価

一般社会人としては、8名の代表的な意見を表2にまとめた。複数の人が、原文の他に子ども向けとコミュニケーション障がい者向けの印刷物を作成した意味は評価してくれた。しかし、評価の中で目立ったのは、コミュニケーション障がい者向けの文章表現が、どうしてコミュニケーション障がい者に読みやすいと考えられるのかわからないというものだった。

印刷物の持ち帰りに見られた来館者の反応

来館者に対しては、あえて意図を説明せず、「子どもなどを対象にやさしく書き直したものと、漢字やひらがなが読みにくい人のために書き直したものを用意した」ことのみを知らせた。したがって、多くの人は「漢字やひらがなが読みにくい人」を母語が日本語以外の人であると理解することが予想できた。ただし、障がいについてよく知った人は、「漢字やひらがなが読みにくい人」が失語症者を含むコミュニケーション障がい者のことだと認識したと思う。

表3に3種類の原文と、子ども用、コミュニケーション障がい者用に試作したそれぞれの印刷物を、来館者が持ち帰った数と割合（%）を示した。表3であきらかなように、70部用意した持ち帰り用の印刷物の内、明治時代に作られた尋常小学唱歌「大黒様」を持ち帰った人がもっとも少なく、昭和時代の文章である「いたずら者の野兎の話」を持ち帰った人がもっとも多かった。

高齢者では明治時代や大正時代の原文を持ち帰ることが多いものと予想したが、時代をさかのぼるほど、持ち



図3 南方熊楠作 「兎と亀との話」原文



図5 南方熊楠作 「兎と亀との話」をコミュニケーション障がい者向けに直したもの



図4 南方熊楠作 「兎と亀との話」を子ども向けに直したもの



図6 山口昌男作 「いたづら者の野兎の話」原文



図8 山口昌男作 「いたづら者の野兎の話」をコミュニケーション障がい者向けに直したもの

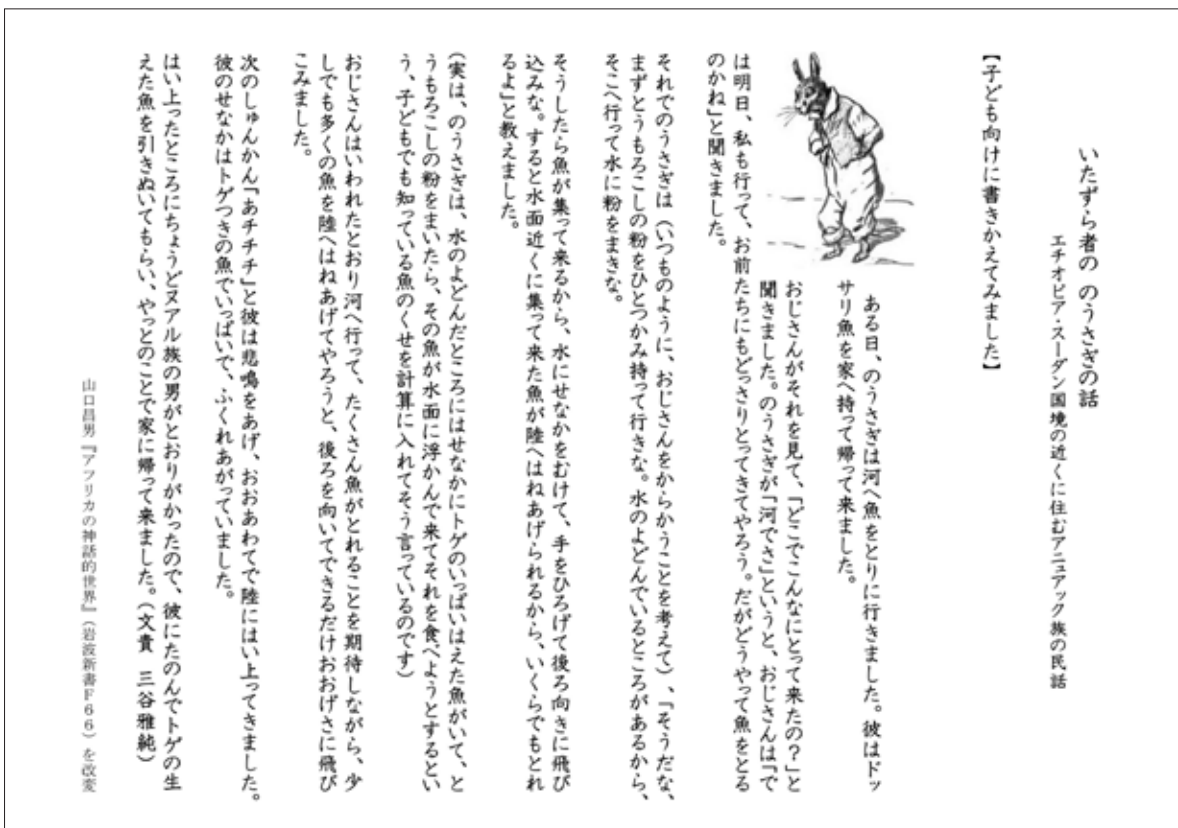


図7 山口昌男作 「いたづら者の野兎の話」を子ども向けに直したもの

表1 コミュニケーション障がい者による文章表現に対する代表的な評価

A	縦書きの文章は読みにくい。横にしてくれた方が読みやすい。横書きの時は、文章に続けて、ルビをカッコに入れて振ってほしい。ルビはひらがなにこだわらずに、漢字のルビでもよい。(注1)
B	段落ごとに文章を分けると読みやすい。一文ごとに分けてもよい。
C	文節ごとにブランクを入れて、どこで単語が切れるのかをわかるようにしてほしい。(注2)
D	唱歌「大黒様」は、歌だから縦書きでもわかりやすい。縦書きの場合は、横にルビを振るとよい。ただし、ルビがルビであると認識できるように、(ルビ)というふうにかっこに入れてほしい。唱歌「大黒様」はまとまっているので、字が小さくならないため、A4でよい。
E	子ども用に作成した唱歌「大黒様」の説明は、小さい字にして下にまとめる。でないと、情報が二行に渡ってしまい、頭が混乱する。
F	絵を入れると解りやすい。「兎と亀」や「兎が鮫をだます」シーンなど、できるだけ細かく、絵で文章を書くようなつもりで入れてほしい。
G	アフリカの民話と熊橋の民話は、字のフォントを大きくしてA3で横書きにし、なるべく文章を分けてほしい。
H	印刷物一枚に、ひとつの主題しか入れないでほしい。

失語症者を含むコミュニケーション障がい者に、コミュニケーション障害者を想定して試作した唱歌「大黒様」、「兎と亀との話」、「いたずら者の野兎の話」の書きかえたもの(図2, 図5, 図8)を評価してもらった。ひらがなや漢字を読む能力や、どれだけ長い文章を理解できるかといった文章能力は、人によっていろいろだった。細かくは、この表の意見には反する意見など、さまざまな少数意見があった。

注1) 「漢字のルビでもよい」というのは、「縦書き(たてがき)」でも「たてがき(縦書き)」でもよいことを意味する。

注2) 「文節ごとにブランクを入れて、どこで単語が切れるのか」のような表現方法のことである。

帰る割合は下がっていた。これは、この時期の来館者に高齢者が少なかったためか、高齢者には、社会教育施設からものを持ち帰るといった習慣がないためか判断できなかった。

「兎と亀との話」と「いたずら者の野兎の話」では、原文よりも子ども向けに作成したものを持ち帰った人が

多かった。しかし、いずれもコミュニケーション障がい者向けに作成したものは、あまり持ち帰らなかった。これはコミュニケーション障がい者向けの印刷物を避けたためか、「漢字やひらがなが読みにくい人」用に用意された印刷物のために健常者が遠慮した結果なのかは、判断がつかなかった。

表2 一般社会人による代表的な評価

30歳代、女性	アヌック族の民話のもともと生きている人から人へ語り継がれた話で、その土地の言葉で聞かされたら、かなりの臨場感や力強さなど話を聞いたものの耳に残るのではないかと。それを文字言語にすると臨場感が消滅せざるを得ない。イラストや写真など、ビジュアル表現を多くすると感じがつかめる。 A4の配布物は、文字が多い印象を受ける。 ルビも丁寧にふられており、知的な問題を抱えた方、聴覚に障害がある方や、発達障害の方などへの配慮を感じる。 印刷は色つきの紙にするとよい。 「いたずら者の野兎の話」では、登場人物のせりふを分けておくとうわかりやすい。
30歳代、女性	失語症の方は身近にいるが、どんな困難があるのが想像がつかなかった。
40歳代、女性	失語症者が横書きの方が読みやすいというのはどういうことなのだろうか？ イメージできない。
40歳代、女性	「漢字やひらがなが読みにくい人」のための文章は、どうして失語症者にとって有効なのか、わからなかった。
50歳代、男性	自らが当事者でない限り、障がいがあるようなものであるか、本当には理解できない。
50歳代、男性	印刷物を配るだけでなく、ダウンロードできるようにされているのはとても良い試みである。私自身はアナログで携帯端末などはほとんど利用していないが、最近は手軽に使う方が増えているので、今後、需要も多くなってくると思う。 外国の方の場合は多少イメージできるのですが、失語症の方にとって普通の文章がどのくらい読みにくいものなのか、まるで想像がつかない。ただ、単にルビをつけるだけの場合は違った印象になるのがよくわかる。 ちょっとした心遣いで改善されることもたくさんあるのだと思う。普段気にしていないし、気がつきもしないので、このような試みはとても参考になる。
50歳代、女性	失語症者の文章理解力は想像がつかない。
70歳代、男性	子ども向けに丁寧になおされていますので子どもにも十分理解可能だと思います。 子ども向けについては、イラストをつけるのでしょうか。小さい子ども向けの印刷物は絵本のようになると思います。 実在の兎について、文化的な印象は全くないのですが、これらの三つのお話は、兎という存在にある印象をもたせてくれるように思います。兎に文化的印象を重ねて想像してもらおうことを考えますと、これらのお話の選択は適切だと思います。 失語症者が、横書きが読みやすいというのは、もしかして脳の縦と横の認識の差が関係しているのではないのでしょうか。

文意を変えないように注意して、表現を書き替えたところがある。

表3 導来館者の反応（配布物を持ち帰った数/用意した数，%）

	原文	子ども向け	コミュニケーション 障がい者向け
尋常小学唱歌「大黒様」	11 / 70 15.71		13 / 70 18.57
兎と亀との話	19 / 70 27.14	39 / 70 55.71	7 / 70 10.00
いたずら者の野兎の話	27 / 70 38.57	49 / 70 70.00	7 / 70 10.00

尋常小学唱歌「大黒様」の原文は、もともと子ども向けである。

コミュニケーション障がい者にとってのわかりやすさ

多くのコミュニケーション障がい者は、障がい者のコミュニティでのみ社会生活を送り、健常者と共に社会活動をする場面は少ない（たとえば小林，2004；加藤，2010）。一方、現代は、多くの施設は人の精神的・身体的不自由さを軽減する方向で展開されるようになった。実物を収蔵し、閲覧に供することが主目的であった博物館でも、バリアフリーが公益社会のひとつの柱になろうとしている（濱田，2005）。そうであってみれば、コミュニケーション障がい者の社会参加をうながすためには、言葉のユニバーサル化は重要である。

今回の試行からコミュニケーション障がい者に読みやすい文章を結論づけることは、まだできないが、文章作成の上で問題になるところは示せた。それを、再度、簡潔にまとめておく。①ルビは漢字全部に振ってある方がよい。通常のルビの振り方、つまり、行を分けて振ると混乱する場合がある。また、②文章の長いものは理解しにくいので短い文章にする。さらに、③文章は3、4行までにしておき、空行を入れてわかりやすくする。

謝 辞

本研究は、平成23年度笹川科学研究助成（実践研究部門、研究番号23-820、研究者三谷雅純）および大阪ガスグループ福祉財団平成23年度研究・調査助成（研究者三谷雅純）から援助を受けた。奥野花代子さん、広瀬浩二郎さん、米田耕司さん、和崎春日さん、佐藤俊夫さん、隅野光代さん、田中昌明さん、田中加代子さん、澤 雅子さん、小磯貞利さん、津村 哲さん、劉 典江さん、西之原郁子さん、中西祥子さん、石間幹夫さん、安達有吾さん、長谷川康子さん、山家健盛さん、菊池順子さん、今井一郎さん、伊藤雅夫さん、田中久美子さんと、研究のさまざまな段階でお世話になった全ての皆さんに感謝します。

文 献

- 濱田隆士（2005）今後の課題ならびに展望．日本博物館協会（編）博物館の望ましい姿シリーズ4 誰にもやさしい博物館づくり事業 バリアフリーのために．45-47．日本博物館協会，東京．
- 東 憲章（2006）宮崎県立西都原考古博物館におけるユニバーサルデザイン導入の取り組み．日本博物館協会（編）博物館の望ましい姿シリーズ7 誰にもやさしい博物館づくり事業 バリアフリー．46-48．日本博物館協会，東京．
- 広瀬浩二郎（2007）企画展「さわる文字、さわる世界」の趣旨をめぐって——“つくる力”と“ひらく心”を育むために．国立民族学博物館・広瀬浩二郎（編）UD ライブラリー だれもが楽しめるユニバーサル・ミュージアム“つくる”と“ひらく”の現場から．91-108．読書工房，東京．
- 加藤みち代（2010）共同作業センターの現状と課題—障害者自立支援法施行後の実態アンケートより—．信州短期大学紀要 21, 14-19．
- 小林久子（2004）失語症会話パートナーの養成．コミュニケーション障害学 21, 35-40．
- 三谷雅純（2007）博物館テキスト『子ども自然教室』のユニバーサル化の課題．国立民族学博物館・広瀬浩二郎（編）UD ライブラリー だれもが楽しめるユニバーサル・ミュージアム“つくる”と“ひらく”の現場から．45-55．読書工房，東京．
- 三谷雅純（2008）障害のある子どもたちとの社会教育活動：障害の種類に応じた野外活動やテキスト作りを中心にして．人と自然 Humans and Nature 19, 51-60．
- 三谷雅純（2011）ユニバーサル・ミュージアムをめざして：文章のくふうはどこまで可能か？博物館研究 46(6), 58．
- 中村京子（1995）失語症近縁の特殊な障害：失読症・失書症．竹内愛子・河内十郎（編）脳卒中後のコミュニケーション障害．70-80．共同医書出版社，東京．
- 奥野花代子（2006）縄文の丘三内まほろばパーク『縄文時遊館』に創出されたユニバーサルデザインによる誘導・案内方法．日本博物館協会（編）博物館の望ましい姿シリーズ7 誰にもやさしい博物館づくり事業 バリアフリー．16-19．日本博物館協会，東京．
- 竹内愛子（1995）失語症．竹内愛子・河内十郎（編）脳卒中後のコミュニケーション障害．12-64．共同医書出版社，東京．
- 鳥山由子（2005a）博物館における障害者対応の現状—全国アン

ケート調査の結果から一，日本博物館協会（編）博物館の望ましい姿シリーズ4 誰にもやさしい博物館づくり事業 バリアフリーのために，5-9. 日本博物館協会，東京。
鳥山由子（2005b）触るということ. 日本博物館協会（編）博物館の望ましい姿シリーズ4 誰にもやさしい博物館づくり事業 バリアフリーのために，34-39. 日本博物館協会，東京。
山口昌男（1971）アフリカの神話的世界. 岩波書店，東京，208 p.
米田耕司（2007）ユニバーサルな社会における美術館・博物館のあり方. 国立民族学博物館・広瀬浩二郎（編）UD ライブラリー だれもが楽しめるユニバーサル・ミュージアム “つくる” と “ひらく” の現場から，77-88. 読書工房，東京。
全国失語症友の会連合会（編）（2009）易しい失語症の本 第2版（言葉の海 臨時増刊94号）. 障害者団体定期刊行物協会，東京，23 p.

付 記

日本博物館協会（編）（2005）博物館の望ましい姿シリーズ4 誰にもやさしい博物館づくり事業 バリアフリーのために，日本博物館協会，東京，48 p.（2011年6月10日閲覧）[http://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/1298784.htm]
日本博物館協会（編）（2006）博物館の望ましい姿シリーズ7 誰にもやさしい博物館づくり事業 バリアフリー. 日本博物館協会，東京，48 p.（2011年6月10日閲覧）[http://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/1298788.htm]

兵庫県立人と自然の博物館の2010年から2011年にかけてのミニ企画展「ウサギさんようこそ！」の内，【神話（しんわ）や説話（せつわ）に登場するウサギ】（2011年5月10日閲覧）[http://hitohaku.jp/exhibits/temporary_old/2010/2011usagi.html]
兵庫県立人と自然の博物館ホームページとはくブログ『神話や説話に登場するウサギ』の文章は，なぜあんなふうにしたのか？（2011年5月10日閲覧）[<http://hitohaku.jp/blog/2010/12/no/>]
尋常小学唱歌「大黒様」『尋常小学唱歌 第二学年 中』[明治38年（1905年）]（石原和二郎 作詞・田村虎蔵 作曲）が載っているホームページ（2011年6月10日閲覧）[<http://www.d-score.com/ar/A04103002.html>]
「兎と亀との話」『牟婁新報』（大正4年）の載っているホームページ「十二支考 兎に関する民俗と伝説」（2011年6月10日閲覧）[http://www.aozora.gr.jp/cards/000093/files/527_28271.html]
コミュニケーション支援用絵記号デザイン原則（JIS T0103）には約300の絵記号を収載しており，（財）共用品推進機構のホームページから無償でダウンロードができる。（2011年6月10日閲覧）[http://www.kyoyohin.org/06_accessible/060100_jis.php]

（2011年8月2日受付）
（2011年10月19日受理）